氏に対する親密度が互恵的行動に及ぼす影響

高木 幸子

(常磐大学人間科学部コミュニケーション学科)

キーワード: 氏、親密度、選択的夫婦別氏制度

The effect of the familiarity with surnames on the reciprocal behaviors

Sachiko TAKAGI

(Tokiwa University)

Key Words: surname, familiarity, reciprocal behaviors

目 的

今日の日本では、人々のライフスタイルの変化に伴い、婚姻の形態が多様化しつつある。これを踏まえ、選択的夫婦別氏制度の導入に関する議論が活発化してきた。しかしながら、家族の「絆」を保つためには同氏が重要との保守的な意見が根強く、選択的夫婦別氏制度はいまだ導入されていない。

心理学領域における先行研究では、対人関係における意識や行動などの側面への氏名の影響が示されてきた。たとえば、人はおのずと、住環境や職業、配偶者を決定する際に、氏名を含む自己と類似性が高いものを選択する傾向があることが示唆されている (Jones, Pelham, Carvallo, & Mirenberg, 2004; Pelham, Mirenberg & Jones, 2002)。また、こうした選択行動だけではなく、対人魅力の評価にも氏名の類似性が影響することが明らかになっている (津村・村田, 2016)。しかしながら、援助行動などの対人関係における互恵的行動の生起や増減に及ぼす氏の影響に関する科学的知見は少ない。この点を検討することは、選択的夫婦別氏制度導入に際し、家族の「絆」と氏の同異の関係を問題視する我が国においては非常に重要である。

そこで本研究では、氏に対する親密度が互恵的行動に及ぼす影響について、最後通告ゲームを用いた心理実験を通じて明らかにする。

方 法

実験参加者: 東京都内の私立大学生 15 名 (男性 5 名; 女性 10 名) が実験に参加した。平均年齢は 19.93 歳 ($SD=0.57$) であった。実験参加者らは同じクラスに属しており、本実験は授業の一環として実施された。

実験刺激: 実験では、複数の人物静止画像および氏を刺激として用いた。人物静止画像は、JACNeuf (Matsumoto & Ekman, 1988) から日系アメリカ人 (男性 10 名; 女性 10 名) の静止画を抽出して用いた。また、これらの静止画には、髪型や色調の影響が実験結果に混入することを避けるため、眉・目・鼻・口のパーツ部分のみを切り取り、グレースケールに変換する編集加工を加えた。氏は、どの参加者にとっても、同氏が 1 種、友人と同じ氏が 9 種、その他の氏が 10 種となるように選択した。友人と同じ氏は、実験参加者らと同じクラスかつ同じ作業班に属する学生のうち、漢字 2 文字からなる氏を用いた。その他 10 種の氏については、“名字由来 net”

(<https://myoji-yurai.net/>; 2016 年 5 月 8 日取得) から、全国ランキング 700 位以下および 800 位以上から漢字 2 文字の氏をそれぞれ 5 種、計 10 種選択した。

手続き: 実験は、参加者 10 名および参加者 5 名の 2 回の集団形式で実施された。また、実験全体は、(1) 顔と氏の組み合わせ呈示ブロック、(2) 顔のみ呈示、(3) 氏のみ呈示の 3 ブロックから構成されていた。実験は (1) から開始し、(2) と (3) の順は回ごとにカウンターバランスした。実験参加者には、すべてのブロックで総額 600 円を 100 円単位で分配する最後通告ゲームに、回答者として参加することを求めた。提案者は、

呈示された顔と氏の組み合わせ、顔のみおよび氏のみ的人物であった。各ブロックでは、注視点が 1000msec 呈示され、次いでブロックごとの刺激と分配案の組み合わせが 5000msec 呈示された。実験参加者は刺激を観察した上で、手元に配布された回答用紙にある“1. 受け入れる”もしくは“2. 拒否する”のどちらか一方に丸をつけることによって、拒否権を行使した。各ブロックは 140 試行 (提案者 20 名 × 分配案 7 通り) から構成され、全試行数は 3 ブロック合計で 420 試行であった。

結 果 と 考 察

本実験は、氏に対する親密度が最後通告ゲームにおける互恵的行動に及ぼす影響を明らかにすることであった。これを検討するため、本研究では 3 つの分析を実施した。いずれの分析でも、独立変数を氏の種類 (自分と同氏・友人と同氏・その他の氏) とする 1 要因 3 水準の分散分析を実施した。第一の分析では、顔と氏の組み合わせ呈示ブロックにおける受け入れ率に基づいて計算された獲得金額を従属変数とした。その結果、提案者の氏の種類による差はみられなかった ($F(2, 28) = 0.510, n.s.$)。第二の分析では、顔および氏そのものに対する印象の影響を差し引くため、顔のみ呈示ブロックおよび氏のみ呈示ブロックでの獲得金額を算出し、これらの平均を第一の分析から差し引いた差分値を従属変数とした。分析の結果、提案者の氏の種類による差はみられなかった ($F(2, 28) = 1.250, n.s.$)。第三の分析では、氏そのものの効果を検討するため、顔のみ呈示ブロックの獲得金額を第一の分析から差し引いた差分値を従属変数とした。分析の結果、提案者の氏の種類による差はみられなかった ($F(2, 28) = 0.829, n.s.$)。第三の分析結果を図 1 に示す。これらの知見は、氏に対する親密度の違いによって、互恵的行動が損なわれる可能性がないことを示唆している可能性がある。

図1. 顔と氏の組み合わせから顔のみの印象を差し引いて算出された獲得金額の差分平均値。エラーバーは標準誤差を示す。
引用文献: 津村健太・村田光二 (2016). 潜在的エゴイズムが対人魅力に与える影響—潜在的自尊心による調整効果の検討— パーソナリティ研究, 24, 215-217. 他
謝辞: 本研究は科研費若手研究 (B) (26870608) の支援を受けた。